

耳を使う「譜読み」

～視覚にハンディがある生徒を教えるピアノの先生へ～



眼の障害を乗り越え、アメリカで学び、活躍するピアニスト

岩井のぞみ

いわい・のぞみ◎生来の弱視が数年前より全盲となり、その障害を乗り越えながらアメリカで学び、積極的に演奏活動を行っているピアニスト。4歳からピアノを始め、桐朋女子高等学校音楽科を経て桐朋学園大学音楽学部を2009年に卒業後、研究科に在籍。その後渡米。現在、テキサスクリスチャン大学音楽学部のアーティスト・ディプロマコースに在籍し、2012年に修了予定。PIARA ピアノコンクール全国大会最優秀賞、ロゼピアノコンクール第1位、大阪国際音楽コンクール第2位、MTNA コンクール・テキサス地区大会佳作入選、ワイドマン国際ピアノコンクール（ルイジアナ州）特別賞など受賞多数。これまでに植田克己、丸山滋、上野久子、Tamas Ungar の各氏に師事。

私がピアノを始めるきっかけの1つは、家族の教育方針にありました。幼い私これからハンディを抱えて生きていかなければならないとわかったとき、家族は、だからこそ今のうちからいろいろな物に触れ、体験し、挑戦してほしいという願いから、習い事の1つとしてピアノを選んだのです。



ピアノを演奏するためには、まず曲を覚えなければなりません。楽譜が見えず、点字楽譜も使えない場合、耳から覚えるしかありません。もちろん市販されているCDを使って覚えることもできなくはないのですが、それでは楽譜を覚えるというより、その演奏家の演奏をコピーすることになってしまいます。

そこで私は、その曲を弾いたことのある友人などに、できる限り録音をお願いするようにしています。その際に一番気を付けていただいているのは、「テンポを揺らさない」ということです。曲によっては難しいものもありますが、基本的には、メトロノームをかけながら、片手ずつ弾いていただいています。まずは「音を正確に覚える」ということが大事ですので、音や休符を正確に聴きとるため、ペダルもなるべく使わないようにお願いしています。今までに一番聴きやすかった録音は、意外にも電子ピアノで演奏していただいたものでした。グランドピアノで演奏した録音は倍音が鳴ってしまい、特に近・現代の曲では、どうしても聴きとりにくいところ、たとえば片手で一度に4つ以上の音を弾く箇所などがあるからです。

こうして、まずは音を覚えた後に、師事している先生の

力をお借りしながら、楽譜に書かれたさまざまな指示を覚える作業をしていきます。これについては、また別の機会がありましたら詳しく触れていきたいと思います。



視覚に障害がないにかかわらず、譜読みは、曲を始めてから仕上げるまで常に続けていかなければならない作業であり、とても大切な作業です。視覚にハンディがあるということは、譜読みの際、他の人に比べて時間と労力はどうしても多く必要になってくるというだけなのです。ハンディを抱えながらピアノを演奏できることは、決してそう特別なことではありません。指は普通に動くのですから。



今回は、私が実際に行っている譜読みの方法をご紹介します。視覚にハンディがある生徒を教える際には、ぜひ、このような方法があるということを伝えていただければと思います。

日本デビュー 岩井のぞみピアノ・リサイタル

5月24日(木) 19:00 開演

紀尾井ホール

全席自由 一般 3,500円、学生 2,000円

シューベルト《ソナタ第21番 変ロ長調》D 960、J.S. バッハ

《トッカータ ホ短調》BWV.914、ベルク《ソナタ》作品1、ショ

パン《バラード第4番 へ短調》作品52

●リサイタルと同プログラムの記念盤CDを5月に発売予定。

【問合せ】株式会社ハーモニー

TEL 03-3357-3306 FAX 03-3357-3273

MAIL harmony@rose.plala.or.jp